

武器なき国防－「カッパー揆」を押し潰す

三石 善吉*

National Defense Without Weapons: Against the Kapp-Putsch 1920

Zenkichi MITSUISHI *

Abstract

In March 1920, German citizens-officials-workers had won through the Kapp-Putsch with the general strike. This case shows the effectiveness of the nonviolent struggle led by legitimate government against coups d'état in a country. In general with careful research and study of the nonviolent struggles, widespread knowledge of the nonviolent methods, and advance training of the citizens, nonviolent actions would have far more powerful effects against coups d'état.

Keywords: weaponless defense, Kappputsch, general strike, Gene Sharp

1、リュトウィッツ＝カッパー揆〔1920年3月12日～17日〕について

第一次世界大戦〔1914/07/28～1918/11/11停戦〕の結果、ヴェルサイユ条約¹⁾によってドイツは、ヨーロッパにおける重要工業地帯を含むその領土の6分の1を割譲し、植民地と海外の権益を全て失い、軍備は同条約159条以下によって、陸軍10万、海軍1万5千、軍艦10万8千トンに縮小され、1921年5月5日には1,320億金マルクの巨額の賠償が確定した。

1919年初頭ドイツの兵員は、正規の国防軍は凡そ35万人、多様で多数の義勇軍〔Freikorps:主として復員兵からなる志願制の準軍事部隊〕は凡そ25万人。前者35万人を11万5千人に削

減し、後者25万人を全て、1920年3月31日までに解散する²⁾ という途方もない義務を課せられた。かくて軍の解体で職を脅かされた兵士・将校・将軍と、野心満々の政治家〔カッパー〕とが結んで、誕生したばかりの「共和国」に公然と反逆したのである。

以下の論述では、この「リュトウィッツ・カッパー揆」の経過について、特にエーベルト社会民主党 SPD 政権主導の「ゼネスト＝武器なき国防」と言う観点から、事態を時系列的に追っていく³⁾ ことにするが、「武器なき国防」上の戦術やクーデター側の布告などで特に注目すべき事象には、本文中に①②－⑬などの通し番号をつけゴシック体8p、10・5pとした。これら注目すべき事象について

* 筑波学院大学名誉教授、Tsukuba Gakuin University

は、最終第7節「武器なき国防の勝因」で、一括して取り上げ評価することになろう。

なお「カップ一揆」は苛酷なヴェルサイユ条約に反対する「左・右」からの反体制のクーデターのうち、「右」からの「一揆」の一つとして取り上げられるのが普通であるが、本論文では、「武器なき国防」の観点から、シャープの示唆〔注3参照〕に従いつつ、より詳細に論じた。なおこの観点からの邦文研究論文は無いようである。なお紙幅の関係からエーベルト政権、ヴェルサイユ条約、1920年のドイツ労働組合などの節が省略された。

2、義勇軍解体への抵抗

●1920年2月29日〔日〕。この日グスタフ・ノスケ国防相〔1868～1946〕は、ベルリン国防軍第一軍団司令官のワルター・フォン・リュトウィッツ将軍〔1859～1942〕に、ヴェルサイユ条約に従って3月10日までに、二つの強力な義勇軍を解散せよと厳命した。一つは「レーウエンフェルト海兵旅団⁴⁾」で、指揮官はウィルフリート・フォン・レーウエンフェルト海軍少佐〔1879～1946〕、兵力凡そ1,500。本拠地キールに一ヶ大隊〔500程か〕を残し、他は1919/20年の冬、ブレスラウ近郊にて国境警備に就いていた。もう一つは「エアハルト海兵旅団」で、指揮官はヘルマン・エアハルト海軍少佐〔1881～1971〕、兵力凡そ6,000、1920年1月からベルリン近郊〔ベルリン西方約29km〕のデベリッツ演習場に駐屯していた。リュトウィッツ将軍は軍の解体に激しく反対し、エアハルト少佐も解体命令への拒否を決意し、抗議の意思表示をすることで意見が一致した。1920年2月末の時点で、ウォルフガング・カップ〔1858～1922/6/12〕も軍の解体を拒否し早い時期にクーデターを起こすべしと考えていた〔上杉27頁〕。

●翌3月1日〔月〕。エアハルト海軍旅団は、国防相ノスケを招くことなく、抗命の一大パ

レードを敢行した。このパレードでリュトウィッツ将軍は「このような精鋭部隊を、このような動乱で過熱した時代に潰そうとは、とても許せるものではない」と公言した。将軍の幕僚たちはこの公然たる抗命に驚いて、国会の有力な二つの右翼政党の指導者たちと会見させ、将軍の考えを変えさせようとした〔ハフナー-218頁〕。一つはユンカーの支持から成るオスカー・ヘルクト〔1869～1967〕を党首とするドイツ国家人民党 DNVP〔1919/1/19の選挙で44議席〕、もう一つは大企業に支援されたグスタフ・シュトレゼマン〔1878～1929/10/3〕のドイツ人民党 DVP〔同選挙で19議席〕である。

●リュトウィッツ将軍はこの間、3月3日、4日、8日とカップ博士〔博士号を取得している〕と会っている。将軍は「彼は私の企てを聞いても驚きはしなかった」〔上杉104頁〕、と書きとめているが、細部に至るまでの詳細な詰めは、なされなかった。

●3月9日〔火〕。この日の夕刻、両党首との会談が持たれた⁵⁾〔アイク I-255頁〕。この話合いで判明したことは、将軍と両党とはエーベルト社会民主党 SPD 政権の打倒では一致したが、その手段で岐れた。両右翼政党は、ハフナーによれば、国民議会の解散、国会の新選挙、専門家大臣の内閣〔右翼諸党はSPDの政党内閣を学歴なき非専門家集団と蔑視〕、大統領の直接国民投票と言った、合法的な方法を用いてSPDを政権から追落そうとしていた。特にDNVPは〔同党の国会内での指導者カール・ヘルフェリヒ〔1872～1924/4/23鉄道事故死〕とマティアス・エルツベルガー〔zp, 1875～1921/8/26被銃殺〕の裁判が⁶⁾、1920年1月19日から始まったが、判決が何時出るかこの時点ではまだ判明していなかったの〕、来週かあるいは来月に勝訴判決が出たら〔直ちに上記の要求を掲げて〕大々的な宣伝戦を展開することが確定していたし、〔シュトレゼマンのドイツ人民党は、この時点ではまだ反SPD＝反政府的であって「一揆」には同情的であつ

たが、暴力の行使には反対していたので⁷⁾、結局両党は、リュトウィッツ将軍の「軍事的一揆[クーデター]」作戦には乗れなかった[ハフナー-218頁]。他方リュトウィッツ将軍には、国防相ノスケの厳命、3月10日までに義勇軍の解散と言う重大問題が明日に迫っており、絶対的窮地に追い込まれていた。

＜3月10日夜、リュトウィッツ将軍、クーデターを決意する＞

●3月10日〔水〕。この日ノスケ国防相は、陸軍の解体を進めないリュトウィッツ将軍からベルリン＝ドレスデンの二つの師団と二つの海兵旅団の指揮権を剥脱した。この措置を受けた将軍は、たとえ国防軍の支援が得られなくても、軍事蜂起を起こすという彼の計画実行の決意を固めた[lemo]⁸⁾。ノスケ国防相は、海兵旅団を海軍提督アドルフ・フォン・トロータ[1868～1940]の指揮下に移しそこでの軍の解体を期待した[ウィキ英文「カップ一揆」]。

リュトウィッツ将軍は解任命令を完全に無視したが、幕僚たちは将軍が「最悪 Äusserste」に走る前に大統領との話し合いを願った。フリードリヒ・エーベルト大統領は「ご老体は又々おかしくなったか der alte Herr ist nun einmal wunderlich」と機嫌よく応じた[大統領49歳、将軍61歳]。会談は10日、18時に行われた。エーベルト大統領[1971～1925]とノスケ、そしてリュトウィッツ将軍とその幕僚である。リュトウィッツ将軍は「最大限の激しさと厳しさ」で、新選挙、専門家大臣による組閣といった右翼政党の要求を述べ、次いで将軍自身の要求、全国防軍の最高指揮権と解軍命令の取消とを要求した。エーベルトは父親のように in väterlichem Ton 諭し将軍を説得しようとするが、ノスケは軍の不穏な動きを察知していたので、[将軍が「何事かを企てる場合には、ゼネラル・ストライキが引き起こされるであろう」と言って威嚇し(上杉103頁)]、将軍に明日の朝までに辞表を出すようにと厳しく迫った。将軍は激怒して席を立った[以上ハフナー

219頁]。

●3月11日〔木〕、リュトウィッツはこの日の午前中にデベリッツに赴き、エアハルト少佐に今日の夕刻までにベルリンを占領できるかと尋ねた。エアハルト少佐は、無理です一日くださいと言い直ちに準備を始めたが、6千⁹⁾の兵の出動戦闘準備に(勿論睡眠時間も含めて)30時間以上かかった。この命令のあと将軍は初めて、ドイツ国家人民党 DNVP のメンバーやウォルフガング・カップ[1858～1922]¹⁰⁾、エーリヒ・ルーデンドルフ[1865～1937]、ワルデマール・パプスト[1880～1970]と言った「国民連合[Nationale Vereinigung:右翼の政策立案集団]」の面々に、来たる13日には政府を乗取るという軍事一揆の計画を伝えた。一揆の目的は、封建的構造を持った、権威的体制の帝国の復活である。計画はまだ完全に出て上がっていなかったが、彼らは皆リュトウィッツ将軍の計画に同意した[ハフナー-219頁]。①このクーデターは、リュトウィッツ将軍の憂慮・短慮による突発的な軍事蜂起であり、カップにも話さず決行。上杉104頁]。

3、クーデターの発動と正統政府の徹宵閣議

●3月12日〔金〕。この日カップとリュトウィッツは政府転覆の計画について話し合ったが、二人とも目的方向はそれぞれ異なった。カップは政府と共和国の廃絶を、リュトウィッツは憲法の基礎の部分的成功を狙っており意見の一致はなかった¹¹⁾ [②カップは政府転覆を公言してはいたが時期を定められなかった。リュトウィッツとは半年間ほどの交流はあったものの意見は合わず、クーデター実行の日を知ったのは、3月11日のことであった。具体的計画の完全欠如である]。

この12日の午前中にノスケ国防相は、不確かであるが容易ならぬ陰謀の情報を得ており、直ちにトロータ海軍提督をデベリッツに派遣する。提督は前もって電話をかけて現

地視察に赴き、「すべて秩序整然の状態にある」と報告した〔予告済みだから当然である！アイク I-256頁〕。その10数時間後の夜10時、エアハルト海軍少佐はすべて出動準備、整然とした軍に向かって、「ベルリンに軍事進攻する。抵抗は全て容赦なく撃退せよ。ベルリンの中心部・官庁街を占領する」と命じ〔ハフナー-221頁〕、エアハルト海兵旅団6千人は約29km離れたベルリンを目指して夜行軍を粛々と開始した。

出陣の一時間後ノスケ国防相はこの情報を得て、エーベルト大統領と話し合い、ノスケは翌13日午前1時に軍幹部との会議を、エーベルトは同早朝4時に閣議を開くことにした〔ハフナー-222頁〕。ノスケは叛乱軍出動の報を知るや、直ちに二人の将軍を派遣して中止させようとしたが無駄だった。二人の将軍はこの日遅く、叛乱者全員の恩赦と13日午前7時に占領を開始するとの最期通牒を受け取って戻って来たのである。直ちに真夜中の緊急閣議が招集され、叛乱軍の要求は全て拒否された〔上杉110頁、アイク I-256頁〕。

なおこの3月12日、時間は不明であるが、「ヘルフェリヒ対エルツベルガー」裁判の判決が出た。「形式的には侮辱の罪あり」としてエルツベルガーが勝訴し、ヘルフェリヒが訴訟費用を負担することになったが、エルツベルガーはこの日、大蔵大臣を辞職した。これは右翼の勝利、エーベルト SPD 政権の敗北と見えたため、「共和制反対派はこれをただ一突きで倒せるものと信じた」〔アイク I-252頁〕。この12日、バウアー宰相はエルツベルガーに代えて、ヨーゼフ・ウィルト〔ZP1879～1956〕を大蔵大臣に就けた。

● 3月13日〔土〕。午前1時ノスケ国防相は、「国防相執務室へ将官一同〔11人、加瀬102頁〕を集合させて、叛徒に対して必要な防衛措置を取るように命じた。しかし破局的な結果になった。国防省軍務局長ハンス・フォン・ゼークト将軍〔1866～1936〕が、<国防軍が国防軍を

撃つことは致しませぬ Reichswehr schießt nicht auf Reichswehr> と断言したからである。…他の将官たちも皆、ワルター・ラインハルト将軍¹²⁾ 以外は、やはり武力抗争の見込みはないと答えた。すなわち政府は決定的瞬間にベルリンの国防軍から見捨てられたのである」¹³⁾。

国防軍の不忠に打ちのめされて、ノスケ国防相は13日早朝4時からの閣議に出席した。バウアー内閣はこの時点で、国家宰相グスタフ・バウアー〔1870～1944〕と全12省11名の大臣〔経済相と食糧管理相は兼任〕および陸軍代表のラインハルト将軍〔1872～1930、無所属parteilos〕、海軍代表のトロータ提督〔無所属〕から成っていた。ラインハルト将軍は出席したがトロータ提督は出席しなかったと見られる〔待考〕。大統領エーベルトを除いて、全閣僚が出席したものとすると、13名〔SPD6名、DDP3名、ZP3名、無所属1名〕となる¹⁴⁾。

国防軍に見捨てられ、かつ最強の義勇軍エアハルト海兵旅団6千が刻々と首都に迫っている状況をはっきり認識していると言う状況下、エーベルト大統領を議長とする、バウアー宰相政権のこの閣議は、13日朝4時〔3時開始5時までと言う説あり、上杉111頁〕から始まり、激論の末、次の二つの方向性が明らかになった。もちろんこれとて全員一致ではなかった。一つはベルリンにとどまることは叛徒の人質になるだけであるから、ひとまずベルリンを離脱してドレスデンに向かうこと、もう一つは全閣僚名でゼネラル・ストライキへの呼びかけを行うことの二点である〔ハフナー-222～223頁〕。

しかしながら、すぐ次に述べるが、ベルリンを脱出したのは、閣僚全13名〔各人の経歴については日独英wiki〕中6名だけであり、ゼネストへの呼び掛けは SPD の閣僚だけであった。どうしてこのような事態になったのだろうか。閣議決定のこの二点に就いて、セバステイアン・ハフナーが、以下興味深い記述を

している。

13日朝4時から始まった閣議では、〔12日真夜中の緊急閣議で呼び出された〕各大臣は全くの睡眠不足で疲れ切っており議論もついつい声が大きくなってしまふこと、ギリギリの議論になってくると SPD の大臣たちと ZP や DDP の大臣との考え方の違いがはっきり出てきたこと、また副宰相＝法相オイゲン・シッフアー〔DDP1860～1954〕ほか何人かの「〔SPD の労働者派ではなくて〕市民派の *bürgerlicher* 大臣」は、「叛徒たちに橋を懸け」〔後述、③参照〕で説得に当たろうとして、ベルリン脱出に同意しなかったのである〔223頁〕。

<ゼネストへの呼びかけ>

それではゼネラル・ストライキについてはどうなったのだろうか。今日我々の見ることのできる、装飾文字、全23行のゼネストの「呼び掛け文」¹⁵⁾は、大略以下のである。

市民、労働者、同志諸君！軍事一揆 *Militärputsch* が起こされた！…我々は今日再び、流血の傭兵連隊を屈服させるべく革命を起こそうとしているのではない。…労働をやめよ！ストライキを行なえ！この反動的徒党の息の根をとめよ！共和国防衛のために、あらゆる手段をもって闘え！…全ての戦線でゼネストを行なえ！プロレタリアートよ、団結せよ！反革命を打倒せよ！

「あらゆる手段をもって *mit jedem Mittel* 闘え」とあるが、ゼネストの呼び掛けであるから当然、政府主導の「武器なき国家防衛」戦が想定されていると考えて良いだろう。ハフナーによれば、「この呼び掛け文は、彼ら SPD の市民的同僚諸氏の同意なしで採択され、この閣議の間に政府の広報室長によって浄書された。それには、下方に鉛筆でエーベルトと社会民主党の大臣の名前だけが記してあった。宰相のバウアーはその文書に手ずから署名した。SPD 以外の人たちは誰も署名に加わらなかった」¹⁶⁾〔ハフナー-223～224頁〕。

確かにゼネラルストライキは、労働者が資本家に対する闘いの「伝家の宝刀」ではあろうが、政府が主導者として国家的レベルでゼネラル・ストライキを呼び掛けて叛乱政権を追い詰めようなどとは、前代未聞であって、市民派大臣たちが「とんでもないことだ *starker Tobak*〔強いタバコ〕」〔ハフナー-223頁〕とこの案に躊躇したのもうなずける。結果として SPD の大臣だけが署名した。この「呼び掛け」文は、14日の遅くなって出現する〔後述〕。
<三つの戦術…正統政府の避難・話し合い・ゼネラルストライキ>

さて閣僚たちのベルリン離脱の件であるが、すでに指摘したように、大統領のエーベルトのほか、ベルリンを離脱した6名の大臣は、次のようであると思われる。この日つまり、1920年3月13日の午後、避難先のドレスデンから発せられた「ドイツ国民に！ *An das deutsche Volk!*」なる「布告＝アピール」〔英独版ウィキ「カップ一揆」2014/11/21閲覧〕がある。このビラの下段には、「大統領フリードリヒ・エーベルト SPD」の他、「共和国政府」として、宰相グスタフ・バウアー SPD、国防相グスタフ・ノスケ SPD、郵政相ヨハンネス・ギースベルツ ZP〔1865～1938〕、外相ヘルマン・ミュラー SPD〔1876～1931〕、内相エーリヒ・コッホ DDP〔1875～1944〕、再建相オットー・ゲスラー DDP〔1875～1955〕の6名の名前がある。政府の正統性のみを訴えるこの資料から、ベルリンを離脱してドレスデンに向かった大臣は、全閣僚ではなくてこの「3党・6名」だけであると考えて良いだろう。いま現にドレスデンに來ている閣僚名を記載しないと言う理由は無いからである。

するとベルリンに残った閣僚は、次の7名となる。まず法相オイゲン・シッフアー DDP、蔵相ヨーゼフ・ウィルト ZP、経済相兼食糧管理相ロベルト・シュミット SPD、労働相アレクサンダー・シュリッケ SPD、交通相ヨハネス・バル ZP、無任所相エデュアルト・

ダヴィット SPD、ラインハルト将軍無所属である。このうち特に副宰相シッファー法相 DDP 民主党は、ベルリンを離れることなくむしろ叛徒たちに「橋をかけよう」〔ハフナー223頁〕〔③説得＝話し合いで一揆を抑えること〕と考えており、この案にはベル交通相〔1868～1949。zp 法律家、ドイツ国有鉄道の建設に尽力〕とウィルト蔵相〔1879～1956。zp 経済学者、後に首相〕とが従った。

そして SPD の三人のうち、シュミット〔1864～1943〕経済相は、もともとピアノ製造業者であって、同業組合を作って SPD と関係を持ち、その縁で SPD の機関誌の編集者を経て1903年から1918年まで帝国議会議員となった。また1903年には「ドイツ労働組合総同盟 ADGB〔1919～1933〕」の前身である「ドイツ労働組合総務委員会」¹⁷⁾の中央労働委員会の書記を勤めたこともあった。つまりシュミットは労働運動のベテランであった。またシュリッケ〔1963～1940〕労働相は、ギムナジウム卒業後さらに精密工学を3年間学び、1891年まで「ドイツ金属労働者組合 DMV」の労働委員会の書記を勤め、1895年から1919年までその委員長を勤めた人物である。シュリッケ労働相もまた労働運動のベテランである。なおダヴィット〔1863～1930〕無任所相は農業問題の専門家であって労働問題には関わっていないが、なぜベルリンに留まったか不明である。またラインハルト将軍はこの時全ドイツ軍の最高司令官であって、SPD 政権と共にベルリンを離脱する理由はあり得ない。

つまりこの3月13日早朝のエーベルト大統領を議長とするパウアー政権の閣議は、以上の流れから明らかなように、この危機を乗り越えるべく以下の三重の戦術を執ったことになる。ハフナーはエーベルトを議長とする13日朝4時からの徹宵閣議が「混乱し、パニック状態」〔222頁〕であったと繰り返し強調するが、この閣議は閣僚の意見分布に従いつつ、「軟＝硬」合わせた、見事な戦術を打ち立てている。即ち、

第一の戦術は、正統政権の存続である。大統領・宰相を含むワイマル連合三党の指導的人物の一時的緊急避難策である。この戦術は「軟・硬」両策の丁度中間に位置し、正統政権の確たる継続を主張する戦略である。従ってこれを「敵前逃亡」とか「一戦も交えず首都を放棄した」などと非難してはならない。何よりも正統政府の存続こそが、これからの全ての戦略・戦術の中核となり、クーデター政権を「非」正統政権として断固非難断罪し、正統政権を支援する労働者たちの力の源泉とならなければならない。第二の戦術は、副宰相のシッファー法相らを残し、反逆政権との交渉によって政権を放棄させることになれば成功とする「柔軟策」であるが、一揆政権への暗黙の「承認」を前提とするだけに、正統政権にとっては極めて危険な戦術となる。シッファー法相の動きに注目しよう。最後は、ゼネラル・ストライキの実行に関わる「強硬策」である。SPD 系の強力な労働組合と密接な関係を持つシュミット経済相兼食糧管理相とシュリッケ労働相は、ゼネスト決議をしたこの重要な閣議決定を、ドイツの最有力な「ドイツ労働組合総同盟 ADGB」やその傘下の強力な「ドイツ金属労働者組合 DMV」などに伝えて、急遽ベルリンで全ドイツで、強力無比なゼネスト体制を確立し、即実行に移さなければならない。その情報伝達の必須の要員として、労働運動に精通しているこの二人がベルリンに残された。

政府主導のゼネラル・ストライキとは前代未聞であるが、労働運動の経験者なら、例えば三日前の3月10日ノスケ国防相がリュトウィッツ将軍をゼネストで「威嚇」したように、最強の武器としてゼネストに思い至るのはごく自然のことであろう。

またストライキに悩まされる側にとっても、ゼネストは脅威であろう。1919年12月カップら「国民連合」は、軍事クーデター、及びその後の軍事政権の政策綱領〔4〕を作り

上げており、その中に「カップ政権」が極めて恐れ、容赦のない弾圧を加えようとする政策の中心に、労働者のゼネストへの対抗措置があった。即ち次の文章の下線部である〔上杉95頁〕。

○立法的措置。a) 保安措置。戒厳令－重要企業の保護－就労の意思ある者の保護、…b) 立法による警察的措置。…、c) 立法による経済上の措置。失業者扶助の廃止…

○内閣の構成。…最も重要なポストについては、承諾はすでに原則的に得られている。

○ゼネラル・ストライキ鎮圧のための措置。…容赦のない兵力による関与と結合した保安措置。ゼネラル・ストライキの抑圧は、軍において準備している措置の主なものである。鉄道結節点、生存にとって重要な企業の中心となる諸工場（郵便、電信、電話、ガス、水道、電気）の軍隊による保護。…

○新政権任命の技術。ベルリンにおける諸省の軍事占領。大臣および革命時代に任命された諸省などの高級官吏の逮捕（中央地方の急進的新聞の弾圧、破壊活動者の広範囲にわたる逮捕、独立社会民主党員、スパルタクスト、共産主義分子の逮捕〔実行された〕）。

新政府の政治体制や統治理念の開陳と言った重要な点がここには見られないが、クーデター計画としては中々のものではあるまいか。特に注目すべきは、ゼネラル・ストライキに関する、上記下線部である。クーデターによって、エーベルト SPD 政権を打倒しようとするカップら軍事一揆新政権が、最も恐れたものこそ、SPD 系労働者は勿論、急進的な社会主義者や共産党員に指導されたゼネラル・ストライキであった。このゼネストに対しては、「戒厳令」下、「容赦のない兵力による関与＝弾圧」が強行され、指導者を逮捕

して「強制収容所」に投げ込み、連絡や兵站確保のために鉄道・電信・電話・郵便を一揆軍によって保護し、かつ水道・ガス・電機と言った生活に必要な公共施設の確保が目指されている。

カップら一揆一味は、労働者のゼネストを恐れ、しっかりとその対策を練っていたのであるが、**実行決断が唐突で計画が周知されず、計画通りに実行できなかった**〔5〕。またカップ一味が完全に見落としていたことがある。それは、正統政府の呼掛けた国家主導のゼネストであったこと、即ちゼネストの参加者は交通運輸・ガス・水道・電気等に従事する労働者だけではなく、**公務員も職員も正統政府の呼び掛けでゼネストに参加**〔6〕したことである。

4、カップ新政権の誕生：クーデター成功か

●3月13日〔土〕午前6時前後から、空には飛行編隊が曲芸飛行を披露して「お祝い」の気分を盛り立て〔nvdatabase〕、地上ではエアハルト海兵旅団6千の臨戦体制の縦列隊が、荒っぽい喉声で軍歌、《ハーケンクロイツ〔ナチの先駆である！〕を鉄兜につけて、黒白赤のリボンをかけ…エアハルト突撃旅団、これが我らの名だ》を歌いながらブランデンブルク門に到着する。そこにはリュトウイツツ、ルーデンドルフ〔多数の勲章を付けた軍服に鉄兜姿！何と散歩の序に立ち寄ったと弁明した！上杉114頁〕、カップ〔礼服にシルクハット！〕らが待機していた¹⁸⁾。トロータ提督は一揆決起の報を聞き直ちに支援に駆けつけた¹⁹⁾。

午前7時、カップらは帝国宰相府に移動し、「待ち受けていた副宰相シッファーはカップとの短い会談の後立ち去り」新政権が誕生した²⁰⁾。⑦この様相だとカップ政権は旧政権から正式な禪譲を受けたことになる！。カップが帝国宰相兼東プロイセン州首相に就き、国民議会と

プロイセン邦議会とを解散した〔上杉119～120頁〕。リュトウィッツ将軍は全軍の総指揮官・国防相に就任した。内相には元ベルリン警視總監のトラウゴット・フォン・ヤーゴー〔1865～1941〕が就き、文相にはゴットフリート・トラウプ DNVP〔1869～1956〕が就き、海相にはトロータ提督が就いた²¹⁾。軍はベルリンの街の秩序維持に傾注して、要所には機関銃を据え付け、空には航空隊が曲芸飛行を行い、市民の中には窓から「黒・白・赤」の帝制時代の国旗を掲げたり、花束を投げる者もいた〔nvdatabase〕。

ベルリンの正規軍、治安警察、全海軍〔1〕、東プロイセン〔現在大部分がポーランド〕・ポメラニア〔西プロイセン：ダンチヒ=現グダニスクが中心〕・ブランデンブルク〔ベルリンを囲む州：ポツダムが中心〕・シレジア〔現在ポーランドとチェコにまたがる地域〕の軍司令官たちは、全て、正式に新しい国防大臣を承認した〔ハフナー-224頁。その他は正統政府支持軍あり、形勢観望軍あり、やや複雑 nvdatabase〕。ドイツ国家人民党もドイツ人民党もリュトウィッツ将軍に友好的な態度を示した〔上杉113頁〕。バイエルンでは、国防軍は社会民主党の州政府を倒し、右翼のグスタフ・フォン・カール〔バイエルン州首相、在任1920/3/16～21/9/1〕の政権を打ち建てた〔ハフナー-224頁〕。遙か東方では、解体の対象となっていたフォン・レーウエンフェルト海兵旅団は、プレスラウ〔現プロツラフ、ポーランド〕の街を占領して、リュトウィッツ=カップのクーデターに遙か遠方から連帯の挨拶を送った²²⁾。ベルリンの交通機関も、この3月13日〔土〕いっぱい、平常通り運転されており〔上杉178頁〕、クーデター=一揆は、まさに成功寸前に見えた。

この日、しかしながら、ベルリンの宰相府内では些か困難が待ち受けていた。カップが宰相府に陣取り、ドイツ国民に向けて政見を発表しようとするが、広報部長は新政権に抵抗して登庁せず、タイピストは一人も居ら

ず、タイプライターは一台も手に入らず、広報部員はカップの宣言文を印刷しようとしていないのである〔⑧公務員の見事な怠業〕。こうしてカップ新政権では、上級将校たちは翌日の任務を伝達することもできず、在ベルリン以外の幾つかの兵営では、誰が命令を出しているのか、首都ベルリンの状況は一体どうなっているのか全く知る事もできず、混乱状態に陥った〔以上nvdatabase〕。

「新政府は数々の布告を発したが、ストライキのため印刷されなかった」〔上杉116頁〕が、それでもこの13日の遅くになって漸く、帝国宰相府の広報部は宰相カップの布告を「官報」として印字した。それには、ストライキとサボタージュ=破壊工作とを容赦なく弾圧すること、国旗の色はドイツ帝制の「黒・白・赤」であること、反政府の言辞を弄した者を収監する「被逮捕者収容所」の建設を命じていた〔上杉118頁以下〕〔⑨ストへの弾圧、ドイツ帝国の復活、強制収容所の建設(ナチの先駆である)命令は、裏目に出た。労働者たちの決意を強化したのである〕。

またカップのこの13日付の布告「帝政復活の蜂起ではない *Kein Monarchistenputsch!*」には、「旧政府は、帝国大統領と共に逃亡した。我が軍隊は楽隊の音楽と共に進駐し、全ての官庁舎を抵抗もなく占領した」。…新たな戦争の意図があるとか誹謗に等しい流言が流れているようであるが、我が政府は平和・自由・パンを実行することを約束する〔独語原文はdhm/lemo.上杉118～119頁〕。このリーフレットは、兵士たちが人々に配ったり、飛行機からベルリンの街にばら撒かれたりした〔nvdatabase〕。

またこの日、3月13日のリュトウィッツ将軍の発した法令は、前述シッファー副宰相の態度とも併せて、些か注目に値する。すなわち「私はベルリン及びブランデンブルク州に対する執行権を掌握する。この1月13日付の大統領令〔エーベルトの非常事態令のこと〕に基づいて、ノスケ国防相の発した全ての法令はなお

効力を有する」と述べ、新政府は「旧政府＝正統政府」の嫡出子であることを確認しかつ宣布したのである〔上杉118頁〕。このようにしてクーデター＝カップ一揆は、重なる困難にも関わらず、まさに成功寸前であった。

<ゼネスト令の発動！>

しかしながら早くもこの3月13日、カップ一揆にとって「命取り」となるゼネラル・ストライキの波が力強く胎動し始めていた。この13日の午前中の恐らく昼近い頃、ドイツ労働組合総同盟 ADGB の C〔カール〕・レギーン議長〔SPD1864-1920/12/26没〕と、自由職員連合 AfA の議長 S〔ジークフリート〕・アウフホイサー〔SPD1884～1969〕は連名でゼネストを呼びかけた。装飾文字のそのピラには、一番上にゴシック体の大きな字の見出しが三行にわたって、「ゼネラルストライキに向けて！ 全ての労働者〔SPD/ZP等の労組〕・勤め人〔AfA〕・公務員〔DBBドイツ公務員同盟〕に！ 男性も女性も！」とあり、義務を忘れた国防軍部隊は、叛乱将校の指揮下に進軍し、国民によって選挙された政府と並んで、非合法の権力を僭称した。…団結権は…取り除けられ、いかなる思想の自由も抑圧されている。…それゆえ我々は、全ての労働者、勤め人、および公務員に対し、暴力支配に対する一致した抗議の声を挙げ、至る所で直ちにゼネラル・ストライキに入ることを要求する。すべての企業は休止せねばならぬ²³⁾。…〔上杉133頁〕。

この日、3月13日、独立社会民主党 USPD はゼネスト支持を表明したが、ドイツ共産党 KPD は、リープクネヒトやローザ・ルクセンブルクを虐殺したエーベルトやノスケの政府を擁護せねばならない理由は全く無いと、ゼネスト宣言を拒否した〔石川576～577頁〕。同じくキリスト教労働組合総同盟 GCG の総書記局もこの日、下部機関に「経済生活を損なう」と言う理由でゼネストには反対の通報を流した〔上杉134頁〕。

ところでスワースモア大学の nvdatabase が、3月13日「土曜日の昼 Saturday noon から早くも多くの工場が閉鎖された」と指摘するのは、これら ADGB、AfA の呼掛けに直ちに応えた事例であったと思われる。従って nvdatabase が、「ゼネラル・ストライキの正式な呼び掛けがベルリンの労働者たちに届く前に、何千人と言う労働者たちは、すでに自然発生的に spontaneously 就労を停止した」と言うのは些か疑問である。少なくともここベルリンについて言えば、自然発生的ではなくて、ゼネラル・ストライキ決行の、大統領令でもある閣議決定の情報は、ベルリンに残ったシュミット経済相あるいはシュリツケ労働相から、早朝直ちに直接に ADGB に伝えられ、さらに AfA に伝達された。52組合の連合体である ADGB は、即座に傘下の労働組合へとゼネストの呼びかけを伝えた結果、「土曜日の昼から早くも多くの工場が閉鎖された」と推定して良いのではなかろうか²⁴⁾。

5、正統政府の脱出・彷徨

<ドレスデンからシュトゥットガルトへ>

ところで首都ベルリンを離脱した大統領ほか閣僚たちは、どうなったであろうか。セバスチャン・ハフナー〔224～225頁〕によれば、3月13日〔土〕朝6時15分、閣議は打ち切れ、エーベルトや閣僚たちは待たせてあったクルマ〔および、急行列車〔上杉113頁〕〕に急ぎ乗り込んだ〔この二班の構成不明；待考〕。それはエアハルト海兵旅団がブランデンブルク門をくぐる、たった10分前のことであった。彼ら「旧」政府の面々は「ノスケの旧知〔ノスケは1902～1918年までドレスデンに近いケムニッツにて勤務〕で、現在ドレスデン市を支配下においている人物 Noskes alter (Städteoberer)」、陸軍少将ゲオルク・メルカー Maercker 将軍〔1865～1924. 右翼の将軍〕を頼って、一路南下する〔国道96号線で約205km. 今

日列車だと3時間弱)。いまやエーベルト大統領も宰相も閣僚も、「彼らを支える政府機関もタイプストも権力もなく、まさに裸の命をさらしつつドレスデンにて安全を確保しようとしていた」。ところがドレスデンのメルカー將軍は、この13日〔土〕の午前中にリュトウィッツ將軍名の電報を受け取っていた。それは到着と共に閣僚たちを保護検束せよと命じていた〔ハフナー225頁〕。

13日昼12時頃、エーベルト一行が到着した。ザクセン州首相からは「全力を挙げて保護する」と歓迎された。しかし午後1時メルカー將軍が現われ、「上司であるリュトウィッツ將軍の命令に服する。帝国政府の閣員を保護拘禁する」と宣言した。一閣僚が即座に「リュトウィッツ將軍は3月11日以来その職を免ぜられている」と言うのと、メルカー將軍は、この宣言は保留とすると言って立ち去った²⁵⁾。

エーベルト大統領らはこの13日の午後、ここドレスデンにて重要な布告を出した〔上杉129頁〕。既に触れた「ドイツ国民に！」である。すなわち

気違いじみた奇襲によってベルリンの官庁舎は反逆者によって占領された。…政府は1914年から続く流血を避けるべくベルリンを離脱した。「そのような愚挙は、それに内在する不可能性によって数日のうちに崩壊しよう」。政府は本拠をドレスデンに移したが、「いかなる者も憲法に基づく正統政府への服従を保持しており…叛徒ベルリンからの命令は法的に無効である」〔@正統性の強調〕…また「国民議会の解散は違憲である。国民議会の議長にお願いする、早急に国民議会を招集して頂きたいと」…憲法に基づく政府だけがドイツを守ることができるのであって、一揆が継起すればドイツは絶望的となる。暴力に些かでも依拠する政府は国内外で権威を欠き、経済の混乱と交通の

途絶を招き国民を死に至らせるであろう

〔参考、上杉訳129頁〕。

このドレスデンからの告示の狙いは二つある。一つはドレスデンなる SPD・DDP・ZP 三党から成る現政府が唯一の正統政府であることを強く繰り返し主張するものである。DDP や ZP は、既に見たようにゼネストには反対であったから、ゼネストに関しては一言も触れることはできない。ひたすら正統政府に結集せよと訴えるのである。

第二の狙いは、カップの国民議会解散令を断固拒否して、国民議会の議長、中央党 ZP のコンスタンティン・フェーレンバハ〔1852～1926〕への国民議会開催の依頼である。この日〔13日〕の午後この「アピール」が出された後、民主党 DDP のコッホ内相はドレスデンからフェーレンバハ議長と電話で話し合い、国民議会を3月16日にシュトゥットガルトで開くことにした〔上杉114頁〕。議長は直ちに与党議員〔SPD・ZP・DDP〕の委員会を開き、議会を3月17日にシュトゥットガルトで開催すると告示した〔実際は18日開催〕〔上杉130頁〕。

メルカー將軍の態度に「大きな不安」を抱いたエーベルトや閣僚たちは、成り行きに任せない方がよいと判断し、同日13の夕刻〔Abend日没後〕、ドレスデンでは一滴のガソリンも得られず、辛うじて残ったガソリンでケムニッツまで走り、そこで最終の急行列車に飛び乗って、国民議会開催予定地のシュトゥットガルトに向かった²⁶⁾〔上杉123頁。ハフナー225～226頁。なおドレスデンからケムニッツまでB173号線で73kmある。またケムニッツからシュトゥットガルトまで、今日だと列車でフランクフルト経由で8時間ほど、アウグスブルク経由で10時間ほどかかる〕。

<反カップ統一戦線の形成>

●3月14日〔日〕：この日、カップ新政府の閣議が開かれた。歴史文書に残る正式な閣僚は、宰相カップ、リュトウィッツ国防相、トラウゴット・フォン・ヤーゴ内相、ゴットフリート・トラウプ文相 DNVP である。こ

の閣議に元プロイセン邦農業次官のフォン・ファルケンハウゼンが出席した。彼の言葉によれば、「このトランプは百枚のカードのうち、せいぜい一枚しか良い札が見つからなかった」。彼は遠慮なく「カップの退陣を勧めた」が、この時彼に賛同する者は流石に一人も居なかった〔上杉121頁〕。

ストライキ、ゼネラル・ストライキの主導権は、すでに指摘したように、13日早朝にいち早くゼネストの閣議決定を知らされたドイツ労働組合総同盟 ADGB が掌握し、これに自由職員連合 AfA とドイツ公務員連盟 DBB が追随して、労働組合運動は反動的クーデターと闘う、確固とした「反カップ統一戦線」を組むに至った〔nvdatabase、石川574頁以下〕。

3月14日。この日ドイツ公務員同盟 DBB は、ドイツ鉄道員労働組合連合・郵便電話下級官吏連合・郵便電話中級官吏連合・全国郵便電話公務員連合・ドイツ機関士連合・ドイツ警察官全国連合・プロイセン地方公務員連合・司法公務員同盟・陸海軍下級官吏連合・全国公務員連合・下級官吏連合同盟・技術公務員同盟・ドイツ公務員同盟大ベルリン連合・ラインラント＝ウェストファーレン工業地区下級官吏同盟の全14組合の共同の決議を採択し、以下のように組合員に訴えた〔上杉135頁〕。

公務員同盟加盟の諸労働組合は声明する。憲法に対して行った宣誓に基づいて、現行憲法の基礎の上に結成されている政府の指令にのみ従うであろう。…かかる政府の存在しないところでは、労働拒否の手段を適用するであろう…。

この3月14日〔日〕、前記傍線部5組合は、前日13日のギースベルツ zp 郵政相の「鉄道＝郵便事業の保持」の要求を拒否してストライキを決議した。特に鉄道員労働組合連合は「3月14日午後5時、ストライキの合図を出し、…カップとその一味は無制限の団結権を処罰すべきものと宣言して」いると非難した〔上杉135頁〕。

この3月14日、これまで政治的ストライキを拒否してきた「黄色組合のヒルシュ＝ドゥンカー労働組合は、ゼネストを支持し」た。ドイツ共産党中央は下からの労働者の断固たるゼネスト熱に圧倒され、慌てて昨日のゼネスト拒否を覆し「この裏切り者の政府は、いまや諸君たちに救いを求めている」と述べて、この日ゼネストを指令した〔石川577頁〕。

この3月14日、ベルリンで水道が一時的に止まり、ガスと電気も流れを止めた〔上杉179頁、⑩ストライキ指令、中・下級公務員これを実行〕。またこの日、正統政府系の新聞「Freiheit自由」「Vorwärts前進」社が一揆者たちによって占領された。一時間も経たないうちにベルリンの印刷業者たちは全てストライキに入った〔nvdatabase：⑫報道関係者の抵抗-新聞が見られなくなった〕。

また「この〔14〕日の遅くなって、ドイツ共和国大統領フリードリヒ・エーベルトは、一般住民に向かって国粋主義者の蜂起と闘うのを支援してほしいというアピールを發した。この呼び掛けで、国民は一斉に決起してカップ一味と闘うようになり、かつゼネラル・ストライキがエーベルト政権〔SPD閣僚中心〕と社会民主党の執行部〔ウェルス中心〕とによって推し進められた」〔nvdatabase、ハフナー223頁、上杉127頁〕。

この呼び掛け文は、既に述べたように3月12日から13日の徹宵閣議で、エーベルト大統領と SPD 閣僚だけで署名されたものであり、ベルリンに残ったシュミットあるいはシュリッケが、SPD 代表のオットー・ウェルス〔1873～1939〕に署名してもらって、14日の遅くなってようやく印刷＝配布に至ったものと見られる。これは単なる与党の一部である SPD のアピールと言うより、ドイツ共和国大統領の直接のアピールと解され、非暴力的な闘争方法として巨大な力を發揮することになる〔⑬大統領のゼネスト呼び掛け。大きな力を發揮する〕。

6、ゼネストの巨浪とカップ政権の崩壊

<ストライキ死刑令に抗して>

● 3月15日〔月〕：休日明けのこの日、キリスト教労働組合総連合 GCG もゼネストの支持を表明した〔石川577頁〕。ゼネラル・ストライキが、ベルリン全市、ドイツ全土に波及〔石川578頁。上杉179頁〕する中で、カップは次のような「死刑令」〔上杉119、179頁〕、

第一条 国民経済上重要な企業の確保のための法令…〔違反の〕…首謀者およびストライキのピケは、死刑に処せられる。

第二条 この命令は1920年3月16日午後4時をもって発効する。宰相カップ。

を發布したが、他方でカップは、新旧両政府が共同して「ゼネラル・ストライキがドイツ国民に対する犯罪である」と声明することを要求し、これについて旧政府がはっきりした回答を出すまで新内閣の組閣を延期する〔SPD政権がゼネストを中止するはずはなく、有力人物の入閣拒否で組閣不能なのでこう言い逃れた〕と述べ、カップ政権の弱体ぶりを隠さなかった〔上杉131頁〕。

しかもこの日、ベルリンに留まったシッファー法相 DDP はストの急進化を恐れて、暴動を終わらせるべくカップとの妥協策を立てるに至ったが、シュトゥットガルトなる正統政府はこの交渉を喜ばず、コッホ内相 DDP はシッファー副宰相に電話して「もしそのような交渉が行われたら」、政府はシッファーを見捨てると言って脅かした〔上杉182、185頁〕。

この3月15日、エーベルト大統領と正統政府は、本拠をシュトゥットガルト〔到着時不明待考〕に移し、この日の午後、大統領臨席の下に閣議を開き、全員一致でカップの退陣を決議〔上杉131頁〕して、カップ政権との共同声明はおろか、妥協交渉すら断固拒否した。

なお、この3月15日、ケムニッツの労働者3千人が武装して、市の主要部分を占拠し、義勇軍の武装解除に成功した。労働者の武装

闘争はルール地方のエッセン、ミュールハイム、デュイスブルクなどで最も高揚し、赤軍が組織されクーデター軍を打ち破ったと石川氏〔578～579頁〕は述べ、また上杉氏は「ベルリンではゼネラル・ストライキは武装蜂起へとつながらなかった」〔182頁〕ことを、SPD の「右翼日和見主義」的行動として断罪し、革命的武装戦闘的な KPD や USPD と対比しているが、これらの見方は、我々の「武器なき闘争」という視点とは異なった観点からの分析＝評価である。

3月15日〔月〕以降、ベルリン全市を覆うゼネラル・ストライキの様子は、アイクに依れば、「あらゆる官公営事業が活動を止め、市電が走らず電灯は消え、新聞も出なくなった。これはベルリン市民にとって甚だ不快な数日だったが、大多数は一つも不平を洩らさなかった」〔アイク I-259～260頁〕。また nvdatabase によれば、市電、バス、地下鉄が動かなくなり、夕方から全市は暗闇となり、ホテルも食堂も劇場も全て閉鎖され、ガス、電機はもちろん給水さえ無くなった。但しゼネストの例外は、①給水、②病院、③労働者疾病基金部局の三者である〔と指摘されているが、給水は「一時的に」遮断されたようだ〕。新聞は出ず、ただ電話だけが生き残った。ベルリン郵便局の電報係りの職員はカップ政府の要請を拒否した。国営銀行はカップ政権の資金引き出し〔1千万マルク〕を何度も断固拒否した。カップ政府〔カップ〕は力づくで銀行から資金を持って来いと〔エアハルト少佐に、加瀬104頁〕命じたが、流石にこの「銀行強盗」は実行されなかった。

こう言ったゼネスト実行中の労働者たちを駆逐して、何とか生産を再開させようとしたカップ政権は、リュトウウィッツ將軍みずから、ベルリン、ライプツィヒ、ハレの「緊急技術援助部隊」〔TN: Technische Nothilfe。ガス・給水・電気・鉄道と言った死生のインフラ施設緊急救助の準軍事的義勇軍。スト破り部隊としても著名: 英独ウィキ〕

に請うて、ベルリンおよび中部ドイツ工業地帯に電気を供給させようとしたが、労働者の団結は固く、緊急技術援助部隊は何処でも、ただの1キロワットの電流さえ、通すことが出来なかった[上杉177頁]。

こう言った状況は、カップ政権にとってまさに致命的であった。エアハルト海兵旅団は、交通機関を使って移動することが出来なくなった。将校・兵士たちへの特別給与[ボーナス!]の支払いも出来なくなった。軍の必需品[食料・給水・武器弾薬等]の補給さえ出来なくなった。カップ政権はベルリンの高級官吏や上級・下級のあらゆる公務員のゼネストに遭遇して完全に麻痺し、そもそもベルリン市の統治すら出来なかった。

●3月16日〔火〕。昨15日に出されたカップの「死刑令」は、企業での就労を「死の威嚇」でもって強制するもので、企業側にとっては嬉しい措置のはずであったろうが、この日、3月16日の14時、「全ドイツ工業連合」の代表エルンスト・フォン・ボルジヒ[1869～1933、機関車製造で著名、Bolsig社主]らの働きかけで撤回された。「反動をもって知られるボルジヒらも、カップのやり方に大きな危惧を持ったことが分かる」[上杉160頁]。

この16日、正統政府の飛行機が、「軍事独裁制の崩壊」と書かれた、抵抗を呼びかける無数のビラを、首都にシャワーのようにばらまいた²⁷⁾。この16日の夜、ベルリンの一大隊[兵3百から1千人]が反乱を起こして将校たちを拘束し、憲法に立脚する政府への忠誠を誓った[nvdatabase]。

●3月17日〔水〕。政府の機能は完全に麻痺し、3月17日には一揆は完全に失敗した[有沢上205頁]。この日の早朝になっても、一揆叛乱者たちへの救いの手は差し伸べられなかった。ベルリン保安警察は離反してカップの辞任を迫った。ベルリンの街頭では衝突が頻発し、この日までに既に100人以上の犠牲者が出た。これらの状況からカップは辞任すべ

き時と判断して、この日17日水曜日の午後早々、辞任の声明を書いて亡命した。[なおdhm/lemoのカップ伝には「3月17日、ルーデンドルフとリュトヴィッツの圧力によって、カップはこの日の早朝に退陣しスウェーデンに行った」とある][加瀬104頁も参照]。リュトヴィッツ将軍は、なおも軍事独裁者たらんとする夢を持ち続けたが、やがてその夢を捨てた。一揆はこの17日午後6時に[将軍の辞任で]正式に終焉した。混乱した状況がしばらく続いたが、エーベルト体制の権威は全ドイツに亘って回復した[以上nvdatabase]。

この3月17日の夜、カップの補佐官たちは平服に着替えてベルリンを脱出し、リュトヴィッツ将軍も辞任した。優勢な非暴力的非協力運動の中でも、かなりの数の流血の衝突が起こった。「義勇軍」はその後、合法政府に再び従順を誓い、〔3月21日〕隊伍を組んでベルリンから退去し〔てデベリッツに戻〕た。クーデターは、労働者・公務員・官僚・そして一般大衆の連帯した行動によって打ち破られた。篡奪者たちは自分たちの権力掌握を実効あるものにしようとして、一般市民や行政職員たちの協力を求めたのであるが、その全てが集団的協力拒否に遭ったのである。ワイマル共和国には、さらに別の重大な国内問題[経済・賠償問題]があるのだが、共和国は国内の攻撃者に反対する市民・政府による非協力運動と公然たる拒否とによって、共和国初の正面攻撃を持ちこたえたのである²⁸⁾。

7、武器なき国防の勝因

労働者・市民の「武器なき国防」闘争によって、リュトヴィッツ＝カップのクーデターを如何にして崩壊させてしまったのか、本文中にて注意を喚起した、①②以下⑬までの事項を中心にまとめてみよう。

まず1920年3月12日夜10時に発動したこのクーデターは、まずはリュトヴィッツ将軍の

憂慮・短慮による突発的な軍事蜂起であることに〔①〕注意したい。カップもまた政府転覆を公言してはばからなかったが時期を定められなかった。リュトウィッツとは半年間ほどの交流はあったものの意見は合わず、クーデター実行の日を知ったのは、前日の3月11日のことであった〔②〕。このクーデター計画は、④で詳しく触れているが、中々のものだと思われるものの、上記①②で指摘したように、実行決断が唐突で、しかも計画が官僚の怠業で周知されず、計画通りに実行できなかった事〔③〕が最大の敗因である。

首都を離脱した正統政府は三重の戦術を構想した。ハフナーも上杉氏もこの徹宵閣議が周章狼狽して明確な戦術も戦略も立てられなかったと見るが、労働争議のベテランたちは、実に見事な戦術を打ち立てた。第一に、抵抗反撃の拠点としての正統政権の存続が図られた。カップの娘アンネリーゼ・カップ〔父の秘書役〕が鋭く、「権力獲得の最も重要な前提の一つは、エーベルト政府と与党の指導的人物を逮捕することであった。この前提がカップ叛乱に際しては、満たされなかった」〔上杉117頁=注25〕と指摘するように、ドレスデンから正統性を強調するアピール〔④〕を出し、危うく虎口を脱した。

第二に、徹宵閣議にて大統領を含む SPD 閣僚によってなされたゼネラル・ストライキ決定を、シュリッケ、シュミットというベテラン闘士をベルリンに残して直ちにゼネストを実行させたことである。ZP や DDP 閣僚の危惧とは逆に、この前代未聞の正統政府主導のゼネストが巨大な力を発揮した。第三の、シッファー副宰相の「叛徒たちに橋をかけよう」、説得=話し合いで一揆を抑えよう〔⑤〕、とする案も、シッファーが明確な抵抗の姿勢を貫かなかつたことで、カップ政権は旧政権から正式な禅譲を受けた正統な後継政権〔⑥〕とのイメージを与えたが、それはゼネストの巨大な力によって打ち消された。公務

員も職員も公然と怠業を敢行〔⑦〕し、正統政府の呼びかけに応じてゼネストに参加〔⑧〕した。上級官僚も中下級公務員も〔⑨〕迷うことなく大統領のゼネストの「呼び掛け」に応え〔⑩〕、その集積は巨大な力となった。但し既に引用したように、アイクはゼネストに対して、ベルリン市民の「大多数は、一つも不平を洩らさなかった」と言うが、ゼネストを打つ場合、給水・電気・暖房〔伯林3月はまだ寒い〕・食糧・医療などには事前の十全な配慮=準備と、ゼネストを出来るだけ短期間に収束させる確固とした全体的戦略とがなければならぬまい。

カップ政権は労働者・公務員・市民たちの街を埋め尽くす巨大なゼネストに驚き圧倒され、恐れをなして政権を放棄したのであろうか。既に屢説してきたように、全くそうではない。これら労働者・公務員・市民の非協力によってカップ政権はその権力の源泉〔シャープCBDの第二章〕を完全に断たれて支配=統治が出来なくなってしまったのである。つまり、官僚・職員・労働者の協力拒否によって行政機関や社会経済を動かす人的資源を全て失ってしまった。6千の反乱兵の必要物資や資金、工業生産や商品流通という物的資源が入手不可能になった。軍部独裁や帝制復活と言うイデオロギーは一般市民・労働者に拒否され、かつエーベルト正統権力の断固たる拒否にあつてその正統性は完全に剥奪された。社会・組織・経済・運輸通信・国家機構等々を動かす技術的専門的技術集団の協力を全て失った。政権を下から支え統治を可能にするその基盤が全て無くなってしまったのである。

ただ「制裁」力だけが残されたが、非暴力のゼネスト弾圧、強制収容所の建設命令や、スト実行者への死刑の威嚇、言論の抑圧〔⑪〕等々は、公務員や報道関係者等々の抵抗〔⑫〕を誘発し、労働者・市民たちの決意を固めさせ、果ては制裁を発動するはずの軍や治安警

察にも見捨てられてしまった。武器なきゼネスト闘争に対する、過剰な暴力的抑圧は却って人々の恐怖心を払拭させて抵抗に向かわせ、かつ味方の「軍・警」という抑圧装置の離反すら招いてしまったのである。なお若干の例外[上杉180-181頁]はあるものの、ベルリンの労働者や市民は、兵器携帯への誘惑を退けた。これはこの武装蜂起をプロレタリア独裁体制樹立へと暴力的に転化させようとする共産党等の組織力よりも、ゼネストと言う「武器なき闘い」を戦術とする社会民主党 SPD の組織力の方が遙かに大きかったこと[石川579頁]によろう。ゼネスト〔3月23日中止：石川579頁〕によってカップ一揆が崩壊すると、目的を達したゼネストの波が急速に退潮するのはそのためである。

この「リユトウィッツ＝カップ一揆」打倒の事例は、事前の準備や訓練など全く欠如していたにも拘らず、正統政府主導の、1,200万人を動員した巨大なゼネストによる権力の源泉の完全遮断という「武器なき国防」戦略でクーデターを打ち破り、正統政権を守ることができることを証明した重要な事例である。もしこの「武器なき国防」という闘争方法や理念が、広く深く一般市民に浸透しており、かつそのための事前の訓練がしっかり行われておれば、その威力は数倍加したであろう。

注

- 1) 日文 wiki 「ヴェルサイユ条約」→「外部リンク」→「JACAR (アジア歴史センター) Ref. A03021294200、御署名原本・大正9年・条約第1号・同盟及聯合國と独逸国との平和条約及附属議定書(国立文書館)」。但し原文は旧漢字・旧仮名・カタカナ・濁音なし(以下この注記は省く)。PDF69 = 原文135頁以下。2015/3/15閲覧
- 2) Sebastian Haffner, "Die Deutsche Revolution 1918/19", Berlin.2010,S.216, 国防軍40万と。以下「ハフナー〇〇頁」と略称。加瀬俊一『ワイマールの落日』光人社 NF 文庫、90頁に国防軍35万、義勇軍20万と言う。
- 3) G・Sharp の非暴力行動論に依拠するスワースモア大学の "Global Nonviolent Action Database" 中の 'German citizens defend democracy against Papp Putsch 1920' は重要で、「nvdatabase」と略称する。また「Eng.wiki.Kapp Putsch, retrieved 22May2014」は、「英文カップ一揆」と略称。上杉重二郎『統一戦線と労働者政府－カップ叛乱の研究』風間書房1978は極めて重要、上杉〇〇頁と略称。なおカップ一揆を非暴力闘争の観点から取り上げた専論は、Gene Sharp, "Civilian-Based Defense A Post-Military Weapon System", 1990, Albert Einstein Institution, 10-11p.. この著者名・書名・AEI (研究所名) で検索 = 無料ダウンロード可。以下「シャープ CBD、〇〇頁」と略称。
- 4) 二つの海兵旅団に就いては、独英ウィキのそれぞれの旅団名で検索。双方共に、2014/11/8閲覧。
- 5) エーリヒ・アイク『ワイマル共和国史Ⅱ』救仁郷繁訳ぺりかん社1984。有沢広巳『ワイマル共和国物語上下』東大出版会1994。以下「アイクⅡ〇〇頁」、「有沢上〇〇頁」と略称する。
- 6) 後者が前者を侮辱罪で告訴、前者 = ヘルフェリヒは狡知な手段で後者 = エルツベルガーの名誉を傷つけ、敗訴するが後者を政権から追落して目的を達した。有沢上196頁以下。有沢はヘルフェリヒの死を因果応報と見ている。
- 7) 日独英 wiki, Deutsche Volkspartei, retrieved, 5 April 2015。
- 8) dhm, lemo, wolfgang-kapp, retrieved, 9 Nov. 2014。しかしその決意をこの10日, 誰にも話さなかったようだ。
- 9) この日エアハルトが集合命令を発し12日夕刻までに千人程の将校・兵士が集まり全6千となる。上杉117頁。

- 10) 「全くの偶然であるが3月8日カップは東プロイセン代表団の一員としてベルリンに到着していた」とあるが、リュトウィッツの将軍はそれ以前に何度もあっている（上杉104頁）。
dhm. lemo, wolfgang-kapp, retrieved, 9 Nov. 2014.
- 11) 実質的には共和制から第二帝政への政体の変更のことであろう：dhm, lemo, ebenda.
- 12) ラインハルト（1872～1930）。共和国の新設国防省内の初代陸軍統帥部長＝総司令官、親共和派でノスケと共に1920年3月22日辞任。後任はフォン・ゼークト。Eng + Deu. wiki, Walther Reinhardt, retrieved, 30Dec. 2014.
- 13) アイク I 二五六頁。加瀬一〇二頁。ハフナー二二一頁など。激論がなされた。
- 14) Kabinett Bauer: Deu.wiki, retrieved, 12 Apr. 2015。ワイマル期全内閣の全閣僚名はこの方法で全て確認できる。なお陸海二人の軍人は「席あり、但し閣議での発言（権）なし」とあり、厳格な文民統制が遵守されている。
- 15) ハフナー 223頁、上杉127頁、独語原文は dhm/lemo “Geraldstreik 1920”, retrieved, 22 Nov. 2014.
- 16) アイク I -259頁に SPD 「閣僚一同の署名（但しその連名委任状が揃ったわけではないが）」とあるが、石川捷治「ワイマール共和制期の統一戦線運動」『法政研究（九大法）』1980、第46巻2-4合併号、575頁には「社会民主党員の閣僚全員と社会民主党代表のウェルスの署名」がある。閣僚ではないウェルスの署名は閣議後の13日中か。
- 17) Generalkommission der Gewerkschaften Deutschlands 1890～1919までカール・レギーン委員長。
- 18) 上杉112頁。ハフナー 223-224頁、アイク I -256頁、加瀬102頁。ハフナーの224頁の原文は mit raukehlingem Gesang で rau=rauh。なおハーケンクロイツはナチの先駆、黒白赤は帝政ドイツの国旗の色である。また軍歌の曲は、「Ich hatt' einen Kameraden」に始まる「あ
あ我が戦友 Der gute Kameraden」であろうか、待考。
- 19) 海軍はトロータ提督の行動からも判明するように「反動の牙城」と見なされるに至る。山田義顕「ヴァイマル共和国の海軍：再建期（1920～27）」大阪府立大学、『人文学論集』1994：2015/4/15閲覧。
- 19) Deu.wiki, Marine-Brigade von Loewenfeld, retrieved, 8 Nov. 2014.
- 20) 上杉116頁。三石言う、シッファーはこの場でカップ政権を認めないと拒否しこの場で逮捕されるべきであった。最初から「橋を懸ける」と「禪譲」になってしまう。シッファーの重大な誤りである。
- 21) Deutschland, Die Reichsregierungen 1918-1933, retrieved, 26 Apr. 2015（海相は含まず）。上杉121頁は含む。
- 22) Deu. wiki, Marine-Brigade von Loewenfeld, retrieved, 8 Nov. 2014.
- 23) なおこのピラは dhm/lemo. Generalstreik 1920, retrieved, 26 Apr. 2015。呼び掛けの対象は、ADGB・AfA・DBB といったドイツ労働組合の三本柱のほか、ZP系の労働組合など全ドイツの労働組合員と考えられる。
- 24) ハレ、メルゼブルクの事例も ADGB からの連絡があったか（待考）。石川576頁。2015/4/2 閲覧。
- 25) カップの娘アンネリーゼ・カップ〔秘書役〕は「権力獲得の最も重要な前提の一つは、エーベルト政府と与党の指導的人物を逮捕することであった」と言う。「かの父にしてこの娘あり」と上杉氏は慨嘆している。上杉117頁。
- 26) なお上杉114頁の内相コッホの、3月13日午後11時の記事〔パウアー、エーベルトは意気消沈、ミュラー、ゲスラーは元気、私は疲れた〕、および3月14日午前8時の記事〔ゼネスト宣言は馬鹿な事〕は、時間的にはドレスデンではなくて、シュトゥットガルトに向かう列車の中で書かれたのではあるまいか。あるいは全員一緒にドレスデンを離脱したのでは

なくて、先発（エーベルトら）・後発（コッホら）の二手に分かれたのかもしれない：待考。

- 27) Gene Sharp, "Civilian-Based Defense A Post-Military Weapon System", 1990, Albert Einstein Institution, p11。以下「シャープ CBD、〇〇

頁」と略称する。および nvdatabase.

- 28) 以上「シャープ CBD」10～11頁。なおゼネラルストライキは、3月23日に中止されたが〔石川579頁〕、これを巡る政治過程については「上杉181頁以下」など参照。了